第13回　役員訪問　聞かせてください

聞き手／常任理事　藤井美穂

・生年月日　昭和26年1月22日
・出生地　北広島市、その後追分町（現・安平町）へ
・出身大学　札幌医科大学　昭和51年卒　小児科学
・好きな言葉　中庸
・趣味　ゴルフ、映画、囲碁、麻雀、旅行

●忘れられない思い出 －ＲＳウイルスの分離－

藤井：先生が小児科に進まれた理由をお聞かせください。
三戸：ポリクリの時に、小児科か産婦人科に進もうと思いました。
　生命を生み出す「産婦人科」と、未来を担う子どもを診る「小児科」の両科に魅力を感じ大変悩みましたが、私には小児科が合っているような気がしましたので。
藤井：ご卒業後は？
三戸：青森県立中央病院で約3年間臨床を経験。その後、故・中尾亨教授（札医大小児科学講座2代目教授）よりお声をかけていただき、大学でウイルスの研究に没頭しました。
　ウイルスを培養するには、エサとなる新しい細胞を常に用意しなければいけません。研究室に通いづめの日々でした。
　忘れられないのは、ＲＳウイルスの分離に成功したことです。臨床の患者さんの鼻汁を用いて分離できた例は、当時としては珍しいものでした。

●子どもが夢を語れる社会に

藤井：先生がご卒業されてから約30年。昔と今で子どもたちの変化を感じますか？
三戸：子どもたちが変わったというよりは、社会環境の変化による影響が大きいように感じます。
　昔は家族がそろって朝ごはんを食べるのは当たり前でした。当然食事中には家族間の会話があります。会話を通して、自然と人間関係を築く能力が養われていたのではないでしょうか。
　一方現代では、共働き家庭の増加、携帯電話の普及による電子メールでのやりとりなど、言葉による関わりが以前より希薄になりました。加減が分からずにケンカやイジメをしてしまう子どもたちが増えた背景には、こうした状況があるのかもしれませんね。
　子どもたちが夢を語れる世の中になって欲しいものです。「語る」ことは相手がいないとできません。家族をはじめとした社会が、話を聞いてあげられる世の中になることが望まれます。
藤井：まさにその通り。素晴らしいメッセージです。

●親から子へ、世代を越えて診療できる喜び

藤井：昭和61年の開業以来、20年以上地域の小児科医療を支えていらっしゃる先生ですが、思い出深い出来事は？
三戸：子どもの時に通院していた患者さんが、大人になって自分の子どもを連れて来てくれた時、「小児科を選んで良かった」と思います。
藤井：成長の過程を見ることができる喜びは、他科の医師にはなかなか感じられないことかもしれませんね。
　先生を見ていると、正直で真面目な性格が伝わってきます。子どもはそうした雰囲気を敏感に感じ取るのではないですか？
三戸：子どもはシビアですよ（笑）。痛いことをされるとずっと覚えていて、顔を見ただけで泣かれます。
　親との信頼関係だけでなく、患者さんである子どもとも信頼関係を築くことが大切です。何より話を聞くことですね。
藤井：注意欠陥多動障害（ＡＤＨＤ）や高機能自閉症などの症状を持つ子どもが増えているそうですが･･･。
三戸：発生率には議論もありますが、1クラスに1～2人、6％ほどの割合で発生すると言われています。
　問題は親も症状に気付きにくいところでしょう。親に理解してもらえるよう丁寧に説明し、どのような社会で育つのが子どもにとって最善か一緒に考えるように心がけています。

北海道医師会　常任理事　三戸和昭（みとかずあき）

●自らのスタンスを持ちながら公正な立場を

藤井：お好きな言葉は「中庸」だそうですね。

三戸：私の信念のようなものです。中立が必ずしも良いとは限りませんが、多くの人が賛同する意見に耳を傾けて仕事に望まなければいけないと考えています。

医師会活動も同じで、会員のことを考え、多くの人に納得してもらえる選択肢を選ぶようにしています。ただし「自分の考えはこうだ」というスタンスがあって、はじめて“中庸”が活かされるのだと思います。

藤井：医師会での先生の発言、行動はまさに公正。私もこうありたいといつも感じています。

三戸：酔うと感情的になるかもしれないですけどね（笑）。

藤井：医師不足や女性医師の就労問題、勤務医のモチベーション低下など、厳しい状況が続いています。こうした問題を改善するにはどのような対策が必要とお考えですか？

三戸：国民の健康を守るため、医師会主導で医師が働きやすいシステムを考えていかなければなりません。

働きやすい環境を作るには、現場で困っている医師・会員の要望を聞くことが第一。現場の意見を道医で議論したり、日医に伝えることが私たち執行部の役割ですから。

愛犬リリーとの散歩（豊平区西岡水源地）

平成18年　出雲大社にて

インタビューを終えて

常任理事　藤井美穂

子どもたちのよき相談相手に、「夢を聞いてあげたい」

幼少時は昆虫採集に野山を走り回っていたという、まさにイメージ通りの先生。

「子どもたちは今も昔も本質的には変わりません。現代の社会環境が変えた子どもたちの夢を聞いてあげたい」と熱っぽく話される様子から、先生の温かいお人柄が伝わってきました。素敵なメッセージでした。